

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史)(主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第147回 例会 2020年9月10日

《あらためて日本の教育をとらえ直す》

「コロナ禍の中で考えさせられた重要な課題の一つは、教育の問題だったでしょう。参加者の皆さんもこの問題には関心が深く、現在日本の教育の遅れやいびつさが指摘され、今後の方向についていろいろ意見が出され、考えさせられました。」

問題提起 吉田千秋(主宰)



・コロナ禍の休会后、3回目の例会となります。本来の形ではありませんが、こうして集まって意見の交換ができること自体をよししたいと思います。少しでも問題意識を喚起する機会となれば幸いです。さて、全国の小中高の学校が3カ月程休校となるなど、コロナ禍で一

番しわ寄せを受けたものの一つが教育の分野でした。休校等のために学習の遅れは避けられない事態となっていて、教育現場の者は戸惑い、今なお、教育行政の関わる人たちは受験を控える人たちに対する対応に苦慮しています。受験絡みになると一般の関心も高くなりますが、私たちは教育そのものの有り方をもっと真剣に問い直す必要があります。

・1988年に『競争の教育から共同の教育』(共著)を発表して以来、様々の機会に、個人を孤立させ競争に駆り立てる日本の学校教育の能力主義、管理主義を批判し、共同の人間関係の構築を柱とする新しい教育の有り方を提案してきました。教育を人間の共同活動と捉え、学校の役割、教師と生徒の関係、教育の有り方を変える必要があります。かつて明治憲法の制定と共に教育勅語が發布された様に、戦後、日本国憲法の成立に伴って教育基本法が定められました。国家のためではなく、国民のための教育を目標に掲げる、教育の大転換を意図したものでした。教育において重要なことは、一人ひとりが自分で考え

判断する能力を身に付けることです。

- ・ボク個人は学校教育が180度転換される時期に子ども時代を過ごしました。一クラス60人以上で一学年800人以上の大きな中学校でした。担任が予科練出身者で、ある種の反面教師の様な存在でした。京大卒業後、私は名大に移って真下信一先生の下で哲学を学びました。先生の「教育は教える側の人間と、教えられる側の人間のかたちの刻み合いである」という言葉が今も心に刻まれています。教育が単なる上から下への知識の受け売りであると見なすことは正しくありません。教師と生徒は、教師の方が生徒に教え、教師が生徒から教えられる様な関係にあります。
- ・ユニセフが子どもの幸福度に関して38カ国を調査した結果、自分を幸せと思う日本の子どもが他国の子どもと比べて極めて少ないことが分かります。幸せかどうかはもちろんかなり主観的なものです。問題はなぜそう思うのかということです。日本では多くの子どもが自己肯定感を持っていません。教育行政は子どもの側の思いに注意を向けて来ませんでした。
- ・このたびコロナ禍で学校が急に休校になり、教師も子どもも戸惑いを隠せず、現場は混乱しました。政府の要請という形を取っていましたが、自主的な判断の余地は無く、強制的な指示に近いものでした。きちんとした議論はなされず、目的や見通しを明らかにしないままの一斉休校でした。子どもたちは家で何をすればいいのか、共働きの親はどうすればいいのか、と戸惑いました。それは結局政府が仕事をしていることを示すための政治パフォーマンスでしかありませんでした。



- ・大学も自宅待機の休講状態が続き、しばらくしてオンラインを活用した授業が始まって、一部で対面授業を再開するなどしましたが、今だ、本来の状態に戻っていません。一番困惑しているのは何をしたいのかよく分からない新入生でしょう。こういう形のままで、100%授業料を取ることに問題があるのではないかという声も出ています。米国教育学会は、緊急避難的に始まったオンライン授業は、教師を監視コントロールすることにつながりかねないと懸念を表明しています。オンラインによる遠隔授業を積極的に評価して、平常の授業に活用しても構わないとする意見もあります。地域事情や、非常時の必要性は認められますが、常態化した場合、克服すべき問題点が幾つかあって、今後、改めて活用法を考える必要があります。
- ・名古屋大学の中嶋教授は、安倍政権による国家に重点を置いた教育の復古的な転換を指摘して批判しています。安倍政権下、戦後民主主義教育の大前提であった「個人に重点を置いた教育」から「国家に重点を置いた教育」に大きく方向転換が行われ、愛国心や伝統文化の価値を強調する方向に教育基本法は改正されました。個よりも集団、全体、言い換えれば、国や企業の組織の利益に奉仕する人材の育成が教育の目標とされました。個人が軽視される傾向

はコロナ禍に対する対応にも見られます。個々の教科の学習到達目標を変えず、休校で余儀なくされた学習の遅れを取り戻すために、休日を減らしたり下校時間を遅くして補習授業を行ったりして、生徒や教師に無理をさせて、帳尻合わせをしようとしています。

- ・しかし、感染予防のためにやむをえず少人数クラスが、現在おこなわれています。少人数教育は生徒や教える側の教師にとってむしろ歓迎するべきもので、常態化させることを望む人たちも少なくありません。残念ながら少人数クラスという教育に適した環境の実現に政府は今まで前向きではありませんでした。だが、いまあらたに少人数教育への要求運動が広がっています。
- ・諸外国と比べ、日本の教育に際立った幾つかの問題があります。外国の多くの若者は、自分に自信を持っていて、社会の問題にも関心を持っています。対照的なのが日本の若者です。それは、「一人ひとりに考えさせない」、「自信を持たせない」、「自己肯定感を持たせない」、「国や社会の問題への関心を持たせない」教育の結果でもあります。今日は、改めて、コロナ禍で明らかになった問題なども顧慮しながら、教育のあり方についてあらためて考える機会にできればと思います。

意見交流

- *子どものことが気になる。コロナ禍が子どもたちの今後の人生にどんな影響を及ぼすのか。子どもたちには綴り方教育の様に自分の生活に目を向けて自身でよく考えるような人間になって欲しい。
- *日本の教育は文科省の指導要領に縛られて、教科書万能になっている。教科書を離れて自由に学ぶことがあっても構わない。学校では教師と生徒の間に上下の関係が作られ、指導の名を借りた管理統制が日常化している。子どもを大切にすると言葉では

言っているが、子どもが喜べる教育には全然なっていない。

- *コロナ禍の教育がどうのということではない。学校教育は人間を社会、国家の必要に適合させるという目的を持っている。早い話、国家の都合に最適化する能力を持った者が優秀な人材と見なされる。良い大学に入るために、良い高校に入らなければならない。良い会社に就職するためには良い大学に行かなければならない。教育はまた選別格付けの道具と



もなっている。求められる結果を正確に早く出す者が高く評価される。そのために暗記、徹底した反復練習が求められる。子どもたちは適合を強いられる。結果として、学校教育は子どもたちの大きなストレスの原因、それ故また不幸の原因となる。こうしたことは日本の教育に際立っている。

- * 学校教育でストレスが多いことは確かである。戦前の教育は、国家、軍のための人材養成だった。戦後、社会は民主化したが、個人を軽視した教育は形を変えて続いている。戦後は経済の闘いに勝つための人材(戦士)になることを求められている。運動会は、軍事教練を思わせるもので、参加が半ば強制され、好きな者が自由に楽しむなどというものになっていない。
- * 一人ひとりが対面かオンラインかを自由に選択できるようにすればいい。オンラインにはそれなりの長所もある。他人が苦手だという人もいる。ネットであれば、参加したいと思う授業を特定の大学に囚われずに世界中の大学の中から選択することができる。今後必要になるのではないか。
- * 60年代に小学生だった。ストレスの様なものは感じなかった。学校は自分にとって楽しい場所だった。
- * 個性をもっと重んじる必要がある。何が良い子か勝手に決めるべきでない。計算の得意な子もいれば、足の速い子もいる。子ども時代は目立たなくても、隠れた才能を持っている子どももいる。そういう子どもたちがどういう大人になるか。その子どもたちの子どもがどうなるか。誰にも予想がつかない。
- * 分かりやすい先生と分かりにくい先生がいる。分かりやすい先生が好まれるし印象にも残る。教科を学ぶだけでなく生活を学ぶ必要がある。家庭で学ぶことも多い。



- * 一概にオンラインは駄目とは言えない。オンラインによる遠隔授業が必要な場合もある。学校の授業を補うという意味の補修に使うこともできる。また逆に対面でしか十分にできないこともある。教えるということと教えられるということは、教える側の人間の形と教えられる側の人間の形のすり合わせである。教育は互いに刺激し合う生身の人間のやりとりである。
- * 3カ月ぶりに日本に帰って来た。世界を回っていて、気付かされるのは、日本の常識は世界の常識ではない。それぞれにお国柄があって、見方も様々である。学校教育も国柄が現れる。
- * 元は教師だった。振り返って、変えたいと思うことは沢山ある。子どもの人格を十分尊重してあげたかと反省することがある。子どもに一人の独立した人間として接しなかった気がする。もっと生きる自信を持たせて上げればよかったと思う。人を人が評価することに問題があるとも言える。
- * 岐大で非常勤講師をしている。対面教育ができなくなって、何が重要か色々考えさせられた。150名にオンラインで授業をしている。当初課題も多かった。技術的に皆が直ぐ対応できるわけではない。ちゃんとしたパソコンも必要になる。6月から一部対面授業になったが、密集、密接を避けるために、今だ6割はオンラインで行っている。新生が少しかわいそうである。高校の卒業式行えず入学して、学生仲間と接する機会も制限されている。オンラインでは学生同士で議論できない。何が大事か見えて来たように思う。



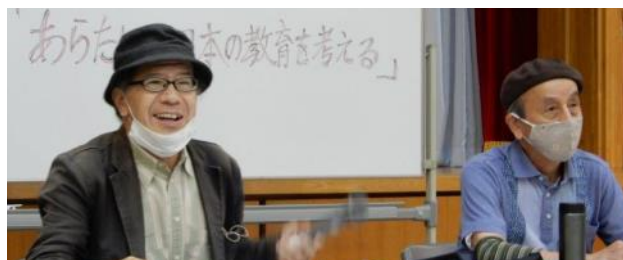
意見交流の最後に 吉田千秋

・日本の教育には色々な問題があります。その中の幾つかは、コロナ禍で子どもたちが自宅待機を余儀なくされて、より一層はっきりと見えて来た様に思われます。ボクは自宅に留まる時間が増えて、ゆとりを持ってあれこれ考える機会でしたが、コロナ禍は多くの家庭にとって一つの試練だったかもしれません。

・日本の教育に際立っていることは、単純な基準を作って、人を画一的に価値評価しようとすることでしょう。分かりやすい評価ですが、人間の多様性を無視した一面的なものにすぎません。さらに、教育を受ける側がこの評価を無条件に受け入れる傾向が強いことが問題を厄介にしています。学校で成績優秀な人間は、単純に、「良い人間」、「より価値のある人間」と見なされがちです。

・日本の教育は教師から生徒への一方通行、知識の受け売りになる傾向が見られます。昔から日本人は、「先生は正しい事を教える」ものだということを大前提としてきました。本当かと疑問を発すること自体、タブー視されていました。管理主義が徹底されていて、学校では文科省の定めた学習指導要領に従って、検定済みの教科書を使った教育が行われています。単純な結果を求め、一面的な評価が過度に重視され、競争原理に基づいた能力主義が横行する背景となっています。ということで、良い(世間的な評価の高い)会社に入らなければならない、そのために良い(世間的な評価の高い)学校に入らなければならない。この道から外れると駄目な奴と見なされます。

・日本の教育は一つの答えを求める傾向があります。



単純に一つの問い(Question)に対して一つの答え(Answer)を出すことが正しいことだと見なされます。だが、問題(Problem)があれば、その解決(Solution)は一つしか無いというわけではありません。現実の世界では、一つの答えを出せば問題が解決するというケースはむしろ稀です。

・というわけで、人々を一つの方向へ向かせ、一つの考えに導く様な教育は、望ましくないだけでなく、非常に危ういものです。答えの有るものだけが問うに値する訳ではありません。現実の世界では、むしろ、答えが無い、あるいははっきりしない課題に取り組むことが必要になるでしょう。

・人間の「最適化」の問題が指摘されました。本当に、私たちにとって、最適化した人間、便利を追求し、企業の利益追求に適った人間を養成することが教育の目的であってよいのでしょうか。一人ひとりの個性を重んじ、個人としての幸せを追求できる社会であって欲しいと思います。

・世の流れに従うだけでなく、本当に大事なものは何かを考える必要があります。ささやかですが、哲学カフェで、当たり前になっていることに疑問をもち、いっしょに考えて前進することができればと思っています。

みなさんの感想など

○教育の議論をする際誰もが陥りがちなのが、自らの経験に寄り過ぎて主観的になってしまうことです。過去に自分が受けた教育と現在の教育現場にはかなりのズレがあるだろうし、ましてコロナウイルス蔓延の今日では、今まで想像もしなかったような問題が現場では起きているでしょう。教育を語り出す前に、人間は過去を美化してしまう傾向がある、という前提を心に留めておく必要があるのかなど。(タニ)

○9月例会で、もと先生であった方々の学校職場の変化を聞きながら、ふと鮮やかに息子の苦悩がひらめいた。例会で発言したように、それは私のなかで封印していた

「息子の不登校とその後の10年の軌跡の意味」が、すると覚醒していった。中学1年生の6月から行けなくなった息子の苦悩がわかった気がした。信頼できるおとながないという不安定さ。「自分が自分であって大丈夫だよ」と後押ししてくれる大人がいなかったのだと気づいた。それからの息子は、じりきで社会と体当たりし、それが息子の人格を刻んだのだと思えた。10年後、息子が会いたいと言って家に来た時、彼は終始なきじゃくっていた。今では3児の父親となり自分なりの価値観を暮らしのなかで活かしている。

例会は私にとっては不問としていたことが溶けだす貴



重な場でした。けれどもその後、あの当時の一つひとつのことが生々しく浮かび、放心の日々でした。あらためて自分なりに整理しようとするところから思うようになった。秋風とともにね。
(尚)

○小・中・高では、休学で未修部分を残しつつも出席の形を整えつつあるようだ。大学では「置き去り」にされている4月新入生がいるとのこと。2年、3年でも、リモート学習で学生側の状況が把握されておらず、こちらも一部「置き去り」。状況に即して学習活動が出来るよう解決することが望ましい。

コロナ禍の中での問題解決であり、大局を語れないが、他方にはこれに乗じて自らの大局を押し進めようとする勢力があり、私は自分の大局を保持しつつ、個別問題に対応したい。
(アダム・スミス)

○今回もマスク着用で、みんなの発言を聞くことになったが、全般的に聞き取りづらかったので今後は改善できないものかと思った次第である。発言の時間切れもあり、この欄で補足をさせて頂く。OECD(経済協力開発機構)の調査によれば、日本の教育向け公費はGDPに対して2.9%だそうだ。ノルウェーは6.4%でトップで、アイスランド、デンマークが続く。だが、日本は世界平均の4.2%にも及ばず、世界では最低レベル。現自民党政権が如何に教育を蔑ろにしているかは、これを見ても明らかである。政府は、安上がりの教育を国民におしつけるのではなく、若者を育成するための「先行投資」をもっとすべきであろう。
(MS)

○もとより現代は、子どもが生活の中で学びそれを生かせることで自らの成長を実感できる、そんな旧来の教育の本質部分が成り立たなくなってしまった時代だ。その中、今学校ではセットされた「疑似的学び」の空間が競争原理の下で展開され、子どもの生活から湧き上がってくる“知りたい・深めたい”課題とは遊離した知識や技能が一方的に教え込まれ、その評価はテストの点数や他人との勝ち負けに目が行くようになってしまっている。その結果、テストでは「できた」としても必ずしも自

らの生活を充実させる道が見えているわけではなく、かえって自らや周りの状況が「分からない」子ども・青年を大量に生んでいる。ましてや「できない」子は自信を喪失し、自己充実への道を七転八倒して探す痛ましい道をたどる例が数えきれない。後者がすべて悪いとは思わないが、もう少しましにならないものかと痛感する。今子ども観・教育観が深刻に問われている。

(フィリピン・ウオッチャー)

○例会の中で、学校教育[特に小中学校]の目的の一つに、現在の社会システムに最適化した人材の養成があるという意見がありました。そうすると異論はあるでしょうが、学校教育は国民国家に役立つ国民を作る制度で、学校の成績のよかった人は国家権力を運営する側に回り、成績の良くなかった国民は支配される側に回るという選別のシステムであるという現実を否定できないと思います。現実社会は多様性とか複雑系の認識、「みんな違ってみんないい」という考えからかなり離れた地点にあるので、学校教育に多様性とかを期待するの、勝つ可能性の低い博打をするようなもので精神衛生上よくないと思います。自分は学校教育とは別の原理で動いている場所をなんとか見つけることができないかと考えてしまいます。

「みんな違ってみんないい」が理想ですがいきなりそこに到達するのは無理なので、他人に直接的な迷惑がからなければ、人のやる事にいちいち目くじらを立てないで少しはかっておいてくれ、またコロナの自粛警察のアンチテーゼの意味で、まずは「みんな違ってどうでもいい」という立ち位置で行動したいと思っています。

(たなか)

○「日本の教育問題」という大きなテーマを掲げてのカフェ。テーマは大きくてもカフェと言うからにはゆったりした心持ちで臨みたい。生まれも育ちも違う者たちが集い、それぞれの置かれている立場や境遇から思いを出し合い、個別事項を一般化して、共通点や違いを見つめる。(演繹法と帰納法)つまるところ、これらは日本の教育問題である…と、こう結びたい。

学校へ行くのが当たり前の時代に育った戦後世代の私たち(国によっては、未だ当たり前でないところもある)、早川教育長の言「死ぬくらいなら、学校へ来なくてよい」は物議をかもしたが、彼にそのように言わしめた現代、これこそが、これからの日本の教育を考える原点である。昨年7月、東長良中の生徒の自死、今年3月、合渡橋下のホームレスの老人の死。被害者、加害者共に現代の世相を反映している。

終戦から75年経て、その間には、大きな価値観の転換

を見た。この中で育った私は今、後期高齢者になってしみじみ自分の一生がなんだったかを振り返る日々である。このコロナ下でうごめく羊の群れのように自分たちを感じずにはいられない。(ひらつか)

○「イージス・アショア」の配備断念を(前)河野防衛相が発表した直後に即「敵基地攻撃能力の保有」の提案が自民党から出たのはなぜだろうか。

今回は秋田、山口両県の地元住民の強い反対をはじめ国民の反対によるところが大きかった。しかし「敵基地攻撃能力」となればそれ以上の攻撃的軍備であり、憲法9条との関係から、即刻出て来たのに驚いた。まずは

憲法を全然意識していない。軍備に関して詳しい方の意見としては、「敵基地攻撃」は様々な要因からして簡単にできるはずがないと仰っているので次の様なシナリオの可能性も排除できないと思う。つまり、自民党の方々(安倍首相も含んで)が描いているのは、「敵基地攻撃能力の保有の実現」の可能性は甚だ低いことを十分に承知していながら敵基地攻撃能力保有による当面の「軍事予算の増加」が目的かもしれない。そうだとしたら、本当に無責任なことであり、あまりにも情けない話だ。今回の提案も前回(イージス・アショア)と同様、民意の強いチェックによって断念へと導きたい。(＊8月22日投稿) (井口)

<世界一周貧乏旅 その15> 「おお、神よ!」

イギリスに滞在中、ある日系新興宗教の集會に参加させてもらったことがあります。その会場に到着し、いきなりぎょっとしたのが、集まった数人の男女が目を閉じ頭の上で両手を合わせ、なにやらぶつぶつ呪文を唱え合わせた両手を小刻みに振り動かしている光景でした。

僕は恐る恐る会場に入り、彼らにインタビューをして一通り話を聞いてみたのですが、「僕らは奇跡を体験したんだよ。神を信じれば救われる。..入ればわかる!」などと、底抜けに主観的なことを言うばかりで、宗教的な教えもへったくれもあつたものではなく、いわゆる宗教ビジネスに騙されてしまった人たちのように見えました。

段々と内容が薄いことにうんざりしてきて、僕はもつとなにか具体的な方法を聞いてみようと考え質問してみました。「その、皆さんの言う「神様」と繋がるには何をしたらいいのでしょうか? やはり、厳しい修行が必要なのでしょうか?」「5000円」「えっ」「5000円で繋がれるよ」「えっおかね..」「年会費5000円払うだけでいいんだよ」

彼らの神様は、年の会費を徴収するそうです。そこに厳しい修行や儀式はなく、5000円を封筒に入れて渡すだけで神様は自らと繋がることをお許しになり、信者は奇跡の恩恵を受けられるようなのでした。

町内会費の取り立てみたいなのを信じている人々と、もう話すことはないかと確信した僕は、彼らの話の途中で「くだらない」と言って席を立ち帰ることを告げると、彼らは「ああ、そうですか」と、神を信じられないのは不幸だなど言わんばかりの憐れみを滲ませた声で見送ったのでした。その後僕は家へ帰り、イライラしながら一人でビールを飲み、「トイレでもよおした彼らから、紙を取り上げたらなんて言うんだらうな」などと皮肉たっぷりにレポートを書いたのです。

ごく一部の、考えることをやめてしまった人々は、自分にとって都合のいい情報を探していて、その都合のいい



情報のみで世界を塗り固めてしまいたいと思っています。反対意見や別の角度からの視点も放棄し、自分の主張と同じ、もしくは似通った意見のみを人やネットから収集し集団を作って、たまに〇〇派と名乗ったりします。

もちろん、誰が何を信じようとも自由です。ただ、神を信じないあなたは不幸になるが、信じる私は幸せになると、他人を見下すことで相対的に幸福を感じるそのさもししい心理は、神様のおかげでもなんでもない、ただの思考停止状態でしかないのではないのでしょうか。

(カモノハシタニ)



ギャヴィン・フッド監督『オフィシャル・シークレット』2018年、イギリス映画

この映画は、Official Secrets(国家機密)をイギリス政府の女性諜報職員が新聞社にリークした実話に基づいた物語である。

2003年3月のイラク戦争開戦前夜、アメリカはイラク侵攻に向けてあらゆる手段を講じていた。アメリカと共同歩調をとるイギリスの諜報機関(政府通信本部)に、アメリカのNSA(国家安全保障局)から1通のメールが届いた。イラク侵攻支持拡大のために、国連安全保障理事会のメンバーを盗

聴するように求めるメールだった。

職員のキャサリン・ガンは、大量破壊兵器も見つからないのにイラクを攻撃するための諜報活動に憤りを感じ、オプザーバー紙にリークする。受け取った新聞編集部では偽情報説が強かったが、結局本物と確信し公表する。

しかし、発表の際に一部修正のミスも生じ、彼女や新聞記者の英断と奮闘もむなしくイラク戦争は開始され、彼女も公務秘密法で起訴されてしまう。さらに、その裁判をめぐる弁護士の政府機関への調査、検事たちとの戦いも凄まじい。裁判は何と、検察が「裁判を維持できる根拠がない」と起訴を取り下げる結果に終わった。政府の違法な戦争が暴露されることを避けたのだ。

内部告発したキャサリンさんは二度日本を訪れ、広島原爆記念館にも寄り、戦争の残酷さを知ったようである。この映画を観たことで、安倍政権による「特別秘密保護法」

「安全保障関連法」(=戦争法)の強行採決にあらためて怒りを覚えた。

さらに、政府職員の秘密保護に反したキャサリンさんが、「政府は変わる。私は国民に仕えているのです。」と言い放った言葉に心の底から震えた。森友学園問題で先年自殺された近畿財務省職員赤木俊夫の苦悩を思い起こさせたからである。

「国家のため」「政府のため」に人権を無視し、戦争に導くのではなく、「国民のため」「一人ひとりのため」に、命と平和のためにしっかり見つめて歩みたいものですね。(SENSYU)



【コロナ時代の読書案内(続)】

*「通信」No.144掲載の読書案内の続編。今回は、比較的安価で、様々な分野からの発言を集めたものを多く取り上げました。参考にして下さい。

(吉田千秋)

○岡田晴恵著 『どうする!? 新型コロナ』(岩波ブックレット)

テレビ出演で知っている方が多い多いと思います。4月檀家で執筆されたものですが、Q&A方式の叙述で大変わかりやすく、新型コロナ問題についての基礎知識と予防について、あらためて教えられることが多いです。

○ユヴァル・ノア・ハラリ、養老孟司、他著 『コロナ後の世界を語る…現代の知性たちの視線』(朝日新書)

以下、「コロナ後」をテーマにしたものをいくつか紹介します。この本では、著名な思想家ユヴァル・ハラリが民主主義の重要性、多様性の世界を描くプレディミカが差別・偏見の排除など、多くの論者が貴重な見解を語っています。

○大野和基(編集)『コロナ後の世界』(文春新書)

この本では、海外の著名な知識人6名のインタビューを掲載しています。J・ダイヤモンドは各国指導者のコロナ対応を検討し、R・グラットン は、コロナ禍などによる価値観の変化に注目するなどして、日本への批判も示しています。

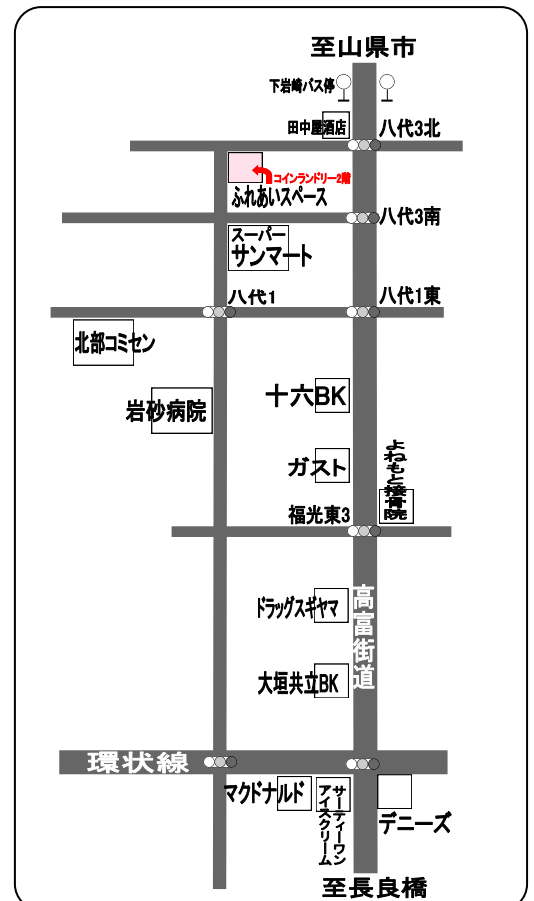
○農文協(編)『新型コロナ 19氏の意見』(農山漁村文化協会)

副題「われわれはどこにいて、どこへ向かうのか」にあるように、この本では、農業や、学校、食生活、弱者など、様々な現場で何が起きているのかを重視し、その地点から、今後何が重要かを内田樹、雨宮処凛氏などが提言しています。

例会会場案内

10月例会は、ポポロのふれあいスペースが会場となりますのでご注意ください。

例会への事前申し込みは不要です



○村上陽一郎(編)『コロナ後の世界を生きる——私たちの提言』(岩波新書)

本書はコロナ危機によって照らし出された社会の現実と課題、今後の展望について、歴史学、経済学、政治学、思想史、国際法学、社会政策学、文化人類学など、実に多方面からの専門家による貴重な見解が示され、新書版ながら重厚です。

○筑摩書房編集部(編集)『コロナ後の世界——いま、この地点から考える』(筑摩書房)

上記のものと同様に、コロナ危機の正体と到来する未来を、免疫学、精神医学、現代思想、政治学、科学史などの分野から実に多角的に解明しようとしています。熱のこもった論集風で大部だが、値段は比較的安く設定されていてありがたい。

2020年後半 哲学カフェ、第25期の予定

例会は19:00~21:00です。

会場は、岐阜市北部コミュニティセンターです。

第146回例会 8月13日(木)	「コロナ危機と気候危機をつなげて考える」 *コロナ危機で、痛めつけられ、傷つけられた自然が少し「回復」した。 *「人災」の気候危機による自然破壊がコロナ危機を生み出したのではないか。	終了 しました
第147回例会 9月10日(木)	「大学入試など、日本の教育問題を考え直す」 *来年度実施予定の「大学入試改革」は、文科省の不手際、批判続出でご破算 *さらにこの間、教育のありかたが根本的に問い直されざるをえなくなった。。	終了 しました
第148回例会 10月8日(木)	「今後の日本の労働のあり方を考える」 *コロナ禍対策で浮上したのは「テレワーク」という「新しい様式」だけでない。 *苦境に陥れられた非正規労働者、フリーランサー等の抜本的改革が必要である。	
第149回例会 11月12日(木)	「世界の行く末を考える—米大統領選の結果をみて」 *11月3日にアメリカの大統領選挙が行われ、トランプ再選なるかが焦点。 *この結果は、世界の政治・経済に重要な影響を与える。さてどうなるのか。	
第150回例会 12月10日(木)	7月に開催できなかった12周年記念行事を行う方向で準備する。 ..「コロナ危機後の世界を考える！」というようなテーマで	

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !! <http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

★教育の問題は複合的要素が多いので、いろいろな観点から考えねばならない。初等・中等・高等教育の在り方と社会的・歴史的背景から、過去・現在・未来の流れで考察すべきであろう。

★「次郎物語」の中で、「子供は唯々かわいがってやるのが大事。」といったくだりがあったように思う。家庭環境の中で大事に育てられた子供は、自立心も強く、生きて行く力も強いのではなからうか。

★したがって、「教育の問題」については、「初めに幼児教育ありき」と、言いたい。「教育学」は英語でpedagogy と言うが、「よちよち歩きの幼児を導く術」とでも言おうか、「幼児教育」が、その原点である。

★因みに、白川文字学によれば、3,300年前の古代中国では、「教育」の「教」(教)には子供を鞭でもって、導くという意味がある。かつ古代文字の「教」には「学ぶ」の字形が、含まれていること

は興味深い。古代より東西を問わず、幼児を社会的に「自立した一人前の大人」にすることは大事なことであった。

★それは、現代でも同じで「教えるもの」と「学ぶもの」との人間的な共鳴・共同作業であったに違いない。

★残念ながら、現今の日本の教育は、明治以来、政府主導型であり、知識詰め込型の教育に重点が置かれてきた。その結果、先生も生徒も疲れ切ってしまう、学び続ける力を失ってしまった様に思う。

★しかし、生涯にわたって、学び続けることの重要性を教えることも教育の大事な使命である。同時に、学生も「学び方を学び」、生涯学び続けることができるなら、人生を豊かにし、自分を幸せにすることができるのではなからうか。

(島田幹夫)

わいわいがやがや
アラカルト

